

特集

2

ひろしま 新・発・健 04

人生を支える在宅医療 緩和ケアにも力を注ぐ

いのくちクリニック(竹原市)



報告

6

■ 国保連合会事業報告①

令和3年度市町等介護サービス苦情処理担当者研修会

7

■ 広島県国保診療施設協議会事業報告

第47回広島県国保診療施設地域医療学会

9

■ 国保連合会事業報告②

令和3年度徴収職員専門研修(国税徴収法・地方税法総則)

10

■ 国保連合会事業報告③

令和3年度データ分析研修会

連載

11

レセプト点検のポイント ▶ 歯科点数表について

12

介護保険だより

13

健康ガイドラインVol.4

口腔ケアで免疫力アップ 感染症対策にも効果的!

15

はつらつWalk No.4(庄原市)

2021紅葉シーズン到来! 茜色に染まる帝釈峡を歩こう

17

国保連合会の主な行事予定 ▶ 令和3年11・12月

実施状況 ▶ 令和3年8月16日~10月15日

18

Special Thanks

今月の表紙 庄原市

庄原市観光キャラクター「キョロやまくん」、全国的に有名な謎の生物「ヒバゴン」とブランド牛「比婆牛」が国営備北丘陵公園にある「はなの展望台」から、紅葉の「神龍湖」を眺めているところを描きました。バックには帝釈峡の「雄橋」、下部には縄文時代の竪穴式住居を模したユニークなデザインの資料館「時悠館」などを組み合わせて、庄原市の魅力を表現しました。



イラスト/ナカムラケイタロウ



人生を支える在宅医療 緩和ケアにも力を注ぐ



いのくちクリニックの井口哲彦院長(中央)とスタッフの皆さん



クリニック外観

04 いのくちクリニック(竹原市)

竹原市では高齢化率が40%近くに達しており、今後も高齢者数が増えていくと予想されています。高齢化の進展とともに、ますます重要視されているのが在宅医療の役割です。こうした中、いのくちクリニックの井口哲彦院長は早くから在宅での緩和ケアや看取りに取り組み、患者やその家族を支えてきました。日々の活動の内容や地域医療にかける思いなどについて聞きました。

医師としてできること その全てを追いかける



クリニックでの耳鼻科診療とともに内科の
訪問診療も行う井口院長



父からもらった書を見ては
今日も心を引き締める



「患者さんや家族の思いを誰よりも大切にできる医師であり続けたい。ずっとそう考えていました」。井口院長は語り始めます。

父親が耳鼻科医、母親が眼科医の家庭で育ち、子どもの頃から医師を目指していた井口院長は帝京大学医学部に進学。卒業後は内科医として、広島大学病院や国立病院機構県医療センターを経て、神奈川県の大和病院に勤務しました。「当時は1980年代終盤。介護保険もまだなかったのに南大和病院は在宅医療に積極的に取り組んでおり、私自身3年間で約50人の在宅患者を診察。患者さんや家族への接し方の基本を学べました」と振り返ります。

地域住民に寄り添う

その後、耳鼻科医になるための研修を受け、1993年には忠海地区で父親が運営する井口耳鼻咽喉科眼科医院を継承。そして2003年から、耳鼻科の枠を超え、本来の内科医として在宅医療に携わるようになりました。

きっかけは、この年に発足した市民団体「広島・ホスピスケアをすすめる会竹原支部」のメンバーたちとの出会いです。同支部は、地域の主婦らが中心になって結成。ボランティアとしてがん患者の自宅を訪ねて話を聞いたり、相談に乗ったりする活動を展開

しました。井口院長はメンバーたちと連携し、患者の自宅を訪問。治療に当たるとともに、年間数人の看取りにも携わりました。

「中には、末期のがんの痛みで苦しむ患者さんもいました。そこで、医療用麻薬の使い方なども学び、緩和ケアにも取り組むようになりました」と説明します。

また、この年には福祉にも貢献しようと、隣町大乘地区に認知症対応型グループホーム「あすなろ竹原」を開設し運営。9人の利用者の主治医を務めました。井口院長はこのグループホームをその後16年間運営し、経営権を福祉団体に譲渡したものの、現在も定期的に訪問診療を続けています。

「医師としてもっと地域の人々の役に立てないか」。そんな思いから、2006年からは大崎上島町の町営診療所で月2回、耳鼻咽喉科の出張診療を実施。1日数十人の患者を診ています。それまで、大崎上島町には耳鼻咽喉科がなかったため、町民はフェリーやバスを乗り継ぎ、1日ばかりで治療を受けていました。出張診療の開始後は、アレルギー性鼻炎などに悩む患者から「わざわざ来島してくるので、ありがたい」と大いに喜ばれているとのこと。

井口院長は「その町に不足している医療を提供していくこと。それも



地元「たけはら音楽フェスティバル」では
自慢の喉を披露



歌の練習に井口院長も飛び入りで加わって参加者も
盛り上がる（グループホーム「あすなる竹原」）



グループホーム「あすなる
竹原」では息子の竜彦さん
も主任として働いている



地域医療の役割です」と強調します。

個性を尊重する

現在、井口院長は毎週月曜（夕方）と火曜（午後）、隔週で水・木曜（午後）、月1回金曜（午後）に訪問診療を行っています。患者の容体や状況に応じて訪問回数を増やすなど、柔軟に対応しています。

取材した日には、グループホーム「あすなる竹原」を訪問。入居者の健康状態をチェックした後、みんなで歌を歌って、楽しいひとときを過ごしました。ちなみに井口院長の趣味は声楽で、月3回広島市でレッスンを受けるほどの本格派。「歌を歌うと、『楽しい』『うれしい』といったプラスの感情が起こり、ストレスを和らげてくれます。心肺機能の維持や認知症の予防などにも効きます」。

このグループホームでは、かつてパーキンソン病と認知症を併発した患者を診たことが貴重な経験になったと振り返ります。70代後半の女性で、二つの疾病が進行し、歩行困難や嚥下障害に陥ったため、広島県西部認知症疾患医療センターと連携。各疾病の薬の配分を調整することで、歩行や嚥下の障害を改善しました。

その際、井口院長が参考にしたのは、30年以上にわたって認知症治療に当たる名古屋フォレストクリニックの河野和彦医師が考案した「コウノ

メソッド」です。これは、認知症の分類を行った上で、症状に見合った処方をできるだけ少量の薬剤で治療する治療体系とのことで、大きな病院で難しい検査を行わなくても、丁寧な問診と適切な治療を行うことで改善を図るのが狙いです。「二人一人の個性や人間性をどこまで尊重できるか。認知症の治療を通じて、医師としてとても大切なことを学んでいます」。

グループホームを出た後は、鼻のがんと持つ患者の自宅を訪問。診察後、患者の手を優しく握り、気さくに話しかける姿が印象的でした。

連携と役割分担

さまざまな訪問診療の中で、井口院長が特に重視しているのが在宅の緩和ケアや看取りです。

緩和ケアとは、末期がんなど、重い病を抱える患者の辛さや痛みを和らげ、支えていくケア。がんの進行に伴い、痛みや吐き気、呼吸困難、腹部膨満感、全身倦怠感など、さまざまな症状が出ます。緩和ケアではまずこうした身体的な苦痛に対し、鎮痛薬や医療用麻薬などを使い、それを除去する治療を行います。しかし、がん患者が抱えるのは、こうした身体的な痛みだけではなく、絶望感や孤独感などの精神的な苦痛や錯乱、抑うつといった患者の心の痛み

がん患者の家で訪問診療。診る側の井口院長も患者さんからも元気をもらうという



「自分らしく生きたい」
その思いに応えるために



に向き合い、どう解消していくかも大切です。井口院長は「がんの患者さんは、トイレに行けなくなる頃、急激に症状が進行することが多くあります。医師としてまず果たすべき役割はこの身体的苦痛を取り除くこと。ここで失敗すると在宅を望んでも、入院せざるを得ないケースもあります」と説明します。その上で患者の心の痛みを解消していくには、「医師の力だけでは難しい。ケアマネジャーや訪問看護師、ホスピスボランティアとの連携と役割分担が何より重要です」と指摘します。

末期すい臓がんを患った70代女性患者のケースでは、退院後に訪問診療を開始。井口院長が投薬を中心にきめ細やかな診療を行うことで、食欲不振や倦怠感、呼吸困難、疼痛を改善。一方で、訪問看護師やホスピスボランティアが患者本人の思いを傾聴し、家族と情報共有するなどして、精神面をサポートしました。その結果、患者は家族と1泊2日の温泉旅行を楽しむことができ、その1カ月後に永眠したということです。

ACPも推進

こうした在宅での看取りを井口院長はこれまで30件以上、経験してきました。看取りを行う上で力を入れているのが、終末期の医療やケアへの患者の希望を、家族、医療・福祉関

係者と話し合い、文書などに残す「アドバンス・ケア・プランニング（ACP＝人生会議）」の推進です。「これは患者が意思表示できなくなる場合に備えるもので、本人の価値観や人生の目標なども共有し、診療に反映するのが目的です」。

重度の肺がんが原因で腎不全を起こし、透析治療を受けることになった70代女性患者のケースでは、井口院長は本人や家族と話し合い、容体が悪化した際は延命措置を行わず、自宅で最期を過ごすといったACPを取り決めました。その後、井口院長や訪問看護師らの在宅医療チームが診療やケアを実践。透析を開始し、1年4カ月後に症状が悪化すると、ACPに基づき、本人や家族の意思をしっかりと確認した上で透析を中止したということです。その1週間後に患者は亡くなりました。

新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中、多くの病院が院内感染を防ぐため、面会制限を設けています。「人生の終末期を家族や友人にも会えず、一人で過ごすのは患者さんにも家族にとっても、とても辛いこと。自分らしい暮らし方や生き方を最期まで全うできるよう、医師として全力を尽くしていきます」。

コロナ禍の時代にあつて、井口院長らによる訪問診療や在宅での看取りの重要性がますます高まります。